創世記第一章の読み方

神様の自己紹介

２０１８年6月
西九州伝道所
佐々木正明

創世記第一章は、なにかと問題になる部分です。いわゆるキリスト教文化に住む人たちの多くは、ここに記されていることはすべて事実であり、真実であると考えていた時代もありました。でも現代では、この部分を何の違和感もなくそのまま信じている人は少ないことでしょう。「科学的」に物事を考えるように訓練された現代人は、この物語を額面通りに読むことはできなくなっています。

熱心なクリスチャンたちの中でさえ、この部分を事実であるとは受け取る人はあまりいません。事実に基づいているのだろうとは思うけれど、何か、別の読み方があるのではないかと考えている人たちもいれば、科学的にはまったく信頼にたりず、ただ宗教的な意味が含まれているだけだと考える人たちもいます。

いっぽう、ここに記されていることはすべて事実であると言って、譲らないクリスチャンもいないわけではありません。天地は六日のうちに造られたとまじめに信じ、進化論に真っ向から戦いを挑む人たちも、実のところ結構たくさん残っています。そのような人たちも、救い主イエス様に信頼している限り、永遠の命をいただくことができるでしょう。五百年ほど前のクリスチャンたちは、みなそのように信じていたのですから。でも、それでは多くの現代人とお話しすることはできません。

聖書は、一点一画にいたるまで誤りのない神の言葉であると信じていながら、現代の科学的な頭と矛盾させないで、天地創造の物語を読みこなすことはできないのでしょうか。非常に難しいことのように思えますが、実は、常識を働かせてふつうに読むならば、案外簡単にできることなのです。

ちょっと考えて見ましょう。天地創造の物語は、今から三千年以上も前に生きていた人々

に対して、当時の人々の必要に応じて書かれたものです。とうぜん、現代の科学的知識をもって理論的な考え方をする人々とは違った感覚で、それぞれの問題と必要を抱えて生活をしていました。ですから、現代人とは異なった理解の仕方をしたはずです。それを前提として書かれているのです。現代人の頭で読むことが、この物語が書かれた意図から外れ、常識を逸した読み方になるのです。

　言い方を変えると、この物語は、天体の始まりだとか、万物の創造のいきさつだとか、順序だとかに興味を持っている人たちに、それらをこと細かく説明するために書かれたのでもありません。そのようなことには、ほとんど興味を持つことすらなかった、古代の人たちに対して語られたのです。つまり、現代人が興味を持つようなことには、書いたほうも書かれたほうも、無関心だったのです。この物語が書かれた目的はほかのところにあったわけです。料理の本は料理を学ぶためのものであって、そこから音楽を学ぼうとしてはならないように、天地創造の物語も、目的に沿った読み方をしなければならないのです。

　では、この物語が書かれた目的はいったい何でしょう。筆者が聖書を読んでいて行き着いた結論は、これは神の自己紹介だということです。神という存在について、きわめて曖昧な理解しか持っていなかった当時の人々に対する、神の自己紹介であると理解して初めて、この物語の全体がよくわかるのです。

　人間は、罪のために神から追放されて悪魔の支配下に落ち、罪の力の中で罪に拘束されながら罪の社会を形成し、やがては完全な滅びに陥らなければならなかったのです。ところが神は、この人間を哀れんで救おうとなさいました。そのために、アブラハムとその子孫を選び、彼らの中から救い主を誕生させようと計画されたのです。ただ、アブラハムもその子孫も、ほかの部族や民族と同じく、神から離れた罪の社会で生きるうちに、すっかり神の姿を忘れてしまい、さまざまな宗教的混迷の中に生きていました。全人類の救い主を誕生させる民族として、アブラハムの子孫イスラエルは、なんとしても正しい神の理解を取り戻すと同時に、宗教的混沌に付き物の道徳の腐敗を正す必要があったのです。

　そこで神は、エジプトで奴隷となっていたイスラエルを救出して、約束の地カナンに定着させるお働きの中で、イスラエル人にご自分を現し、正しい神知識持たせようとなさったのです。すべての点で間違いのないという意味ではなく、少なくても基本的な、原則的な意味で明確な神理解を持たせようと、神は自己紹介を繰り返されたのです。

Ｉ．　指導者モーセに対する自己紹介　　出エジプト記３：１～１４

神は奴隷生活の中で苦しみ叫ぶイスラエルを助け出すために、まず、モーセという人物を指導者として選び出し、彼にご自分を現して自己紹介をされました。このときまでのモーセはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼ばれた彼らの先祖の神について、ある程度知っていたはずです。ただしそれは、多くの神々の中の「イスラエル人の神」という程度で、あまり明確なものではなかったと思われます。その神にどれほど忠誠心を持っていたかについても異論のあるところです。十戒が与えられる前のイスラエルは、偶像礼拝さえ、あまりとがめだてがされていなかったのです。先祖の宰相ヨセフと同じように、モーセも、異教の神に仕える神官の娘を妻にしているほどです。

荒野で羊飼いをしていたモーセは、ある日、炎に包まれていながら燃え尽きない、柴の中から語りかけられる神の声を聞きました。その声は、私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であると、言い慣わされた呼び名を用いて自己紹介をし、モーセが礼拝していた神であることを示した上で、エジプトの奴隷として苦しんでいるイスラエル民族を、救い出す働きをするようにと告げたのです。臆病になっていたモーセは、何とかしてその重責から逃れようしたのですが、声の主である神は、いくつかの不思議な出来事をもってもモーセに迫り、ついに、「私はあるというものである」という、あの有名な自己紹介をするに至るのです。

これは現代人のように、難しい物事を考えることにも慣れている人間にとっても、かなり哲学的で難解な自己紹介です。筆者にもよくわかりません。意味が深すぎるのです。ましてや三千数百年も昔の無教育の人々にとっては、理解困難な自己紹介であると思います。でも、「私はあるというものだ」という意味は、「ない」というものに対する「ある」だと思います。多くの神々が、さまざまな現象を伴ってはいたとしても、本質的に、存在しないものであるということを示唆しているのかも知れません。

あるいは、すべての存在物の根源であるということを、示そうとしているのかもしれません。どちらにしても、それはいま、天と地を創造された根源であり無限である神を前提にして、物事を考えられる私たちだから言えることで、当時の人々には知りようがなかったはずです。ですから、この「私はある」という神の自己紹介をもって、イスラエルの民衆に語ったモーセは、彼らを納得させることができませんでした。そのため、ここでも神みずからが奇跡的な出来事をもって、自己紹介の補足をしなければならなかったのです。

Ⅱ．　多くの奇跡をもっての自己紹介　出エジプト記４：１～１７：１６

「わたしはあるものである」という自己紹介は、とても意味の深いものだとしても、当

時の人々には不可解であったために、神はさらに彼らを納得させるために、自己紹介を続けなければなりませんでした。それが大小合わせて二十以上の、一連の奇跡です。エジプトの王のかたくなさに対して行われた数々の奇跡は、もちろん、エジプトの王に対する「私はお前たちの神々よりも強力な神である」という自己紹介になったことでしょう。同時にイスラエルの民衆に対しても、「私は周囲のどのような神々よりも強い神、あなた方を助けることができる神である」という自己紹介になりました。

エジプトを脱出しても、方角さえよくわからなかったイスラエルの群集を、神は、昼は雲の柱、夜は火の柱を持って導いてくださり、エジプトの戦車が追いかけてきたときには、雲の柱と火の柱をエジプトの戦車とイスラエルの群集の間に立たせ、戦車が追いつけないようにしてくださいました。目の前に紅海が広がった時には、水を二つに分けてくださいました。イスラエルの人々は乾いた道を行くことができたのです。でも、彼らに追いすがって来たジプトの戦車隊は、戻ってきた水に飲み込まれて全滅してしまいました。神はイスラエルをお守りになる強い神であるという、非常に説得力のある自己紹介です。

さらにその後も、神は苦い水を甘く変え、荒れ野の真ん中で毎日必要なパンと肉とを与え、乾燥して水のないところでは岩から水を湧き出させ、アマレク人との戦いでは、奴隷生活で戦闘を知らないイスラエルに、勝利をもたらしてくださいました。

イスラエルの人々はもちろんのこと、モーセもアロンも、これらの奇跡の数々によって、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神が、単なる空念仏に終わる神の名ではなく、本当に彼らを救い、守り、助け、導き、水も食べ物も与え、彼らのために戦ってくださる生ける神の名だということを、確認させられて行ったのです。

Ⅲ.　十戒の付与　出エジプト記２０：１～３

一連の奇跡の数々を体験してエジプトから脱出し、さらに奇跡に継ぐ奇跡で助けられ守られ養われたイスラエルの人々に、神はさらに自己紹介を重ねられました。「私は、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である」と語りかけられたのです。

これはよく知られた十戒の第一戒の前にある言葉です。つまり、十戒が与えられる前提の言葉ですが、十戒だけに注意が奪われて、しばしばこの前提の重要さが忘れられてしまいます。十戒はこの前提があって、初めて正しく理解され、意味を持つのです。この前提がないがしろにされたまま、十戒が読まれ、教えられ、適用され、だれ彼かまわずに押し

付けられるために、大きな問題となるのです。

十戒は、人類全体に与えられた戒めではありません。たとえ全人類に適用できる内容であったとしても、この前提の言葉は、十戒があくまでもイスラエル民族だけに与えられたものであることを、示しています。神は、「私は、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である」と自己紹介をした上で、「あなたには、私のほかに、ほかの神々があってはならない」とおっしゃったのです。ですから、十戒をそのままイスラエル民族以外の人々、神の奇跡を見ていない民族、神の救出を体験していない人々に適用してはならないのです。日本人は十戒をもって裁かれてはならないのです。

さらに大切なのは、神はここで、自分がイスラエルをエジプトの奴隷状態から救い出した神であると、明確な自己紹介をなさっていることです。数々の奇跡の体験が、誰にも否定しようがないほど明白な事実として、新鮮な記憶に留まっているうちに、というより、その奇跡の継続の中に暮らしているうちに、神は、「私があなた方を助けた神である」とおっしゃって、ご自分を示してくださったのです。

「私はあるというものである」という形而上学的な言い方は、本質を突いたものではありましたが、普通の人々がその意味を把握することは、まず不可能でした。ところがここでは、誰にでもわかるように非常に具体的で、手に取るような教え方がされました。あの多くの奇跡はただ助けるとか、滅ぼすというような目的だけではなく、神とはどのような方であるかを、示すためのものでもあったのです。

また十戒のはじめの部分で、神は、イスラエル人の神はご自分だけであることを示しただけでなく、どのような偶像をも作ってはならない、それを拝んではならないと命令をお与えになりました。無限の神は、いかなる有限物によっても表現できず、また、表現されてはならないからです。そういう意味では、有限の人間の言葉をもって神をこまごまと説明しようとする、西欧のキリスト教神学も一種の偶像礼拝であるとも言えるでしょう。

ただ当時のイスラエルの人々にとってこの命令は、多くの神々の中で、私たちはアブラハム、イサク、ヤコブの神を礼拝するということを、強烈に確認するだけのことだったと思われます。ほかの神は神ではないという理解はまだまだ先のことで、まだできていなかったと理解すべきです。ただ、自分たちの神はほかのどのような神よりも、強い神であるという理解はできたはずです。

神はこのようにしてイスラエルの人々に自己紹介をして、理解を深めさせていきましたが、まだ不十分でした。イスラエルの人々がやがて救い主を生み出し、さらに全世界の祝

福の基となるような神観、神理解を持つにはまだ不十分でした。そこで、神は十戒を与えてからしばらくして、指導者モーセを通して天地創造の教えをお与えになったのです。

Ⅳ．　天地創造の物語　　創世記１：１～３１

　神は自己紹介をするにあたって、決定的とも思われる問題を解決しなければなりませんでした。それは神が自己紹介をするとき、どうしても用いなければならない、「神」という言葉です。「あるというものである」という自己紹介も、それに先立って、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神という伝統的言い方があってのものです。神が、「私は神である」と言われるときには、どうしても「神」という言葉を用いなければならなかったのです。

　ところがその「神」という言葉が意味するところは、天と地をお造りになった神とは似ても似つかない、当時の人々が礼拝していた神々、巷に転がっていた神々を指す神だったのです。この「神」という言葉を、ただ人々の礼拝の対象だったというだけで、天地の創造者が借用しなければ、ご自分を紹介できなかったのです。無限の創造者が、ちっぽけな有限の人間の底の浅い言葉を用いなければ、つまり限りなく大きな神が、小さな小さな人間の、貧弱な舞台まで降りてこなければ、人間と意思を疎通させることができなかったのです。

　ちょうど今の日本人が神といった場合、巷にあふれている神々を思い出すのと同じように、天地創造の神が「私は神だ」と言った場合、当時のイスラエルの人々は、その辺に転がっている神々を思い出したのです。ただ日本人の場合は、そのような八百万の神々はあまりにもばかばかしくて、神なんていないといってしまいがちなのに比べて、当時の人々は同じようにばかばかしい神々であっても、それなりに真剣に信じ、祀っていたという違いはあります。

　イスラエルの人々の多くは、周囲の民族に倣って、天体や自然あるいは動物などを神としていたのですから、神が私は神だと自己紹介をした場合、それらの神々を思い起こすのが自然でした。それでも神はその神という言葉を用いて、自分を紹介しなければなりませんでした。「私は神であるが神ではない。私は神ではない神である」と、ややこしいことを言わなければならなかったのです。

　そのややこしいことをややこしくなく言うために、お用いになったのが天地創造の物語です。物語と言いますが、これは単なるフィクションではなく、基本的に事実なのです。ただし微に入り細に入り事実なのではありません。ちょうど五歳の子どもに、赤ちゃんは

どうして生まれてくるかを説明するようなものです。神が意図されたのは、天地創造の経緯や過程や順序などを、科学的に正しく教えることではありません。そのようなことは当時の人々にとって、何の益もなければ、興味もなかったからです。

神が意図されたことはまず、自分が神は天地の創造主であるという事実を、明確に理解させることです。これさえはっきりすれば、自分は他のあらゆる礼拝対象物とはまったく異なる、いま流で表現すれば、次元の異なる存在であることが明々白々になります。すべてのものは、無であったところから、この創造者によって存在させられるようになったのです。創造者と被創造物との関係が、明らかにされなければならなかったのです。

神の意図から言うならば、この創世記の最初の部分は、「神は」ではなく「神が」と訳すべきでものですが、聖書全体の流れから、「神は」とされるのでしょう。神は、「私が」天地を創造したのだ。私が天地を創造した神だ。存在するあらゆるものは、ただ私によってのみ存在を許されたのだ、だから、あなたたちが礼拝し、崇め、仕えるべき神は私以外にはないのだと、おっしゃっているわけです。

実際、私たちが信じている神は天地を創造した神であるということは、異邦人伝道においては非常に大切であり、福音宣教の基礎的な伝達事項であり、最初に明らかにされなければならない点です。ただ「神」「神」と言い続けても、聞く側の神についての理解がまったく違うのでは、真実は伝えられないからです。パウロの宣教の例を見ても、まったくの異邦人の間では、「私たちの神は天地をお造りになった方である」という、説明から入っているとおりです。

次に大切なのは、神が人間を創造したという事実です。人間も神によって創造されたもののひとつに過ぎないと教えたのではなく、むしろ、私があなた方を造ったのだ。あなたたちも私に造られたものであると教えたのです。ただし、人間はほかの動物たちとは異なって、神に似せて造られたということが、あえて挿入されています。これが大変大きな意味を含んでいるのです。

人間は単に動植物の頂点に立つというだけではなく、神に似せられているのです。神に似ているというのは、人間がただ有機物の集合体であるだけではなく、物質を超えた存在、霊的な存在でもあるということです。神は霊だからです。このような分析は、三千年以上も前の人にはできなかったことかも知れませんが、少なくても、神と同じ性質を持って、神を感じ、神を礼拝し、神と交わることができる能力があることは理解できたことでしょう。あらゆる地上の創造物の中で、人間だけが神意識を持って、神を礼拝したいという本能を持っているのです。

ここで神は、人間に対し、人間の本来のあり方を教えているように読むことができます。神に似せて造られた人間は、確かに神に似ていたとしても、あくまでも被造物であり、神ではありません。ただ神に似ているがゆえに、神と心を通じ合わせ、神と交わることができるということです。人間は高等動物として、ほかの高等動物たちとある程度の心の交わりをすることができます。だから犬や猫をペットとする人たちがたくさんいるのです。神と人間は、人間が神に似せて造られたことによって、神との心の交わりを楽しむことができます。人間は自分を創造してくださった方を礼拝し、敬い、崇め、感謝と喜びを持って、信頼しながら生きるのです。それこそが、人間が神に似せて作られた目的です。その目的に沿った生き方をするのが造られた者の役目であり、本分です。

そういう生き方がまずあって、人間は神が作られた自然を管理する役目も、はたすことができたのです。自然を管理する働きが、創造者を創造者として崇めることの先に来てはならないのです。それが、十戒によって、私以外の何者をも神としてはならない。ほかの何ものをも礼拝してはならないという命題につながるのです。本来、すべての人間が創造者である神のみを礼拝すべきなのですが、このとき神は、イスラエルだけにご自分を現し、人間本来の役割をお教えになったのです。

さらに神は、この天地創造の物語に、当時の人間の生き方に関する重要な原則的規律を絡ませて、お教えになったと考えるべきです。それは神が六日で天地を創造し、七日目にお休みなったという言い方です。六日間という時間の長さも、それぞれの日に造られたものの順番も、厳密な意味で事実そのものを教えようとしたのではなく、ほかの教育意図があって語られたものと理解すべきです。そのような物語の用い方、あるいは教育の方法は、現在でも多くの民族の間で普通に用いられているものです。細部にいたるまでのすべての事実を告げるのではなく、基本的な部分あるいは原則的な部分は事実を語っていても、全体的にほかの目的のために使用されるために、その目的のために、物語が構成されるのです。

一般的な福音派の立場からすると、とても受け入れられない解釈かもしれませんが、言葉というものはそういうものです。西欧の伝統を汲む福音派の神学は、あまりにも字句に拘泥し全体の言葉の意味を失いがちです。言葉は事実を事実と伝えて真理を語るものではありません。また真理は物理的原則によって決定される「事実」にあるのではなく、もっと大切な霊的な「事実」にあるのです。その霊的な事実は、言葉の字義通りの意味や物理的原則に縛られていないのです。

この点、事実こそ真実だというような感覚が強い文化に生きる人には、理解できないと

思います。本当のところ、アメリカやイギリスの福音派、特に根本主義（ファンダメンタル＝原理主義）の立場にはそういう人たちが多く、私たちを惑わせています。世界が文字通り六日間で作られたと信じなければ、良いクリスチャンではないような言い方をされる場合さえ、少なくありません。真実は事実によってだけではなく、寓話やフィクションを通して語られるのです。大切なのは、そのようにして語られた真実に誤りがないということです。

イエス様も、神様がお休みになることはないと教えて、七日目に神様がお休みになったという表現を文字通りにとるべきではなく、ひとつの表現方法であることを示唆し、さらに、人間が安息日のためにあるのではなく、人間のために安息日があるのだと諭し、天地創造の物語も、字義通りに理解されるべきではないことを示しておられます。

六日間働いて七日目は休むという生活習慣は、神がお造りになった自然とその中に生きている人間にとって、もっとも調和の取れたものなのでしょう。奴隷生活という強制された環境の中で、満足な休暇も取ることができないで働き、自分で自分の生活を決定できないままで生きてきた、イスラエル人にとって、きちっとした休暇をとるという習慣はなじみのないものでした。それで神は、このような表現方法で、「強制的に」休暇をとるように教え、さらにその安息日の習慣を延長して、休耕地やヨベルの年をはじめとし、さまざまな社会の規則をお定めになったのです。

安息日はまた、単純な社会構造の中でこそ意味のある規定だったのです。人間社会が発展し、複雑になればなるほど、すべての人がそろって、安息日を遵守するということが困難になるのです。それがイエス様の時代には、すでに目に見えるようになりつつあったわけです。そこでイエス様は、安息日は人のためにあるという、正しい理解を改めてお教えになったということです。

天地創造の物語には、ほかにもいくつかの教育的な挿入句が見られます。たとえば、創造されたものが非常に良かったとくり返されている言葉には、神が造られたものは完全であったことが示されています。動植物が造られたとき、種類に従って繁殖するようにくり返されている点は、進化論との兼ね合いでとても面白いと思います。人間が自然の世界を管理するように命じられている点も、自然保護などの観点からとても意義深いものです。

はっきりしているのは、天地創造の記述で教えられているのは、科学的な経緯や順序や年代ではなく、霊的な真理であるということです。現代科学と同じ土俵に立って、天地創造の物語が科学的にも信頼に足りると証明しようとするのは、科学という物差しをもって聖書を測ろうとすることであり、聖書よりも科学が信頼できるという前提に立つ論争です。

それがはじめから間違っているのです。

結び

　聖書によりますと、私たちの神は万物の創造者であり、すべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのものの内に存在し、すべてのものをご自分のうちに収めておられる神です。仮にブラック・マターと呼ばれる、物質なのか物質でないのかさえよくわからないものも、物質を構成する要因であると言われるヒッグス粒子も、どうやらありそうだとやっとわかってきた多くの異次元も、神にあって神のうちにあるのです。このような神を本当に正確に説明するのは、現代科学や理論物理を駆使しても無理なことです。その無理を、神は三千数百年も前の人々にもわかりやすく、自己紹介という形でなさったのです。それが天地創造の物語です。

　その中には、どうして三千年をはるかに超える昔に、これほど科学的にも正確なことが言えたのか、不思議に思うことも含まれていることでしょう。五歳の子どもに赤ちゃんがどのように生まれるのか説明するとき、そこには科学的な事実も含まれるに違いありません。創世記第一章の記述もそれと同じことです。天地創造のいきさつを事実どおりに教える目的で語られたものならば、現代科学で証明されている事実とも調和しなければなりません。でもこれは、神の自己紹介のために用いられたのです。そう理解することが大切です。そうしてこそ、正しく理解できるからです。